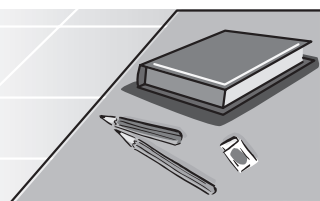


# 学生時代と図書館 81

## －原爆マンガを読みふけたころ－

中西 久実子



人生長く生きていくと時には壁にぶつかることもあります。そのときにポキンと折れて萎えてしまわないためにどうすればよいのでしょうか。私の場合、困った時はいつも「本を読む」ようにしています。本を読んで考えていれば何かしらヒントが得られておのずと出口がみえてくるからです。私がこのように考えるようになったのは次のような体験からです。

大学時代。毎日授業が終わって向かった先は図書館でした。本を借りるためではありません。当時私の大学には、「グループ学習室」という小部屋がいくつかあり、そこでクラブの仲間たちと資料を調べたり、議論したりしていたのでした。私は当時大阪大学英語研究会（OUESS）に所属していました。今でも印象的なのは、1986年のチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故についてのディベートです。「原発について英語でディベートなんて自分にはとても無理だ」と思いました。しかし、被爆の現状、子供の将来、食品の安全性などさまざまな観点から資料を収集し始めました。調べてみると、実に多くの人が様々な意見を述べていることに驚かされます。それらを読んで、自分はこの意見に賛成し、この意見には反対だということを決めていきます。そして、資料がそろったら、論理的に相手を説得していく方法を仲間と一緒に考えておきます。すると、不思議なことに、出口がおのずと見えてくるのでした。本で調べて考える楽しさはここにあります。図書館は困ったときに私たちを出口へと導いてくれる空間なのだと思います。

このように「本を使って考えていく」という自主性のストラテジーは、よく考えてみると、もっと幼いころに教えてもらっていたように思います。それは大阪の豊中市立北丘小学校でのこと。この小学校は生徒の自主性を尊重する学校でした。たとえば、音楽の時間は、当時流行

していたポップスの曲をクラス全員で演奏するのです。「まねごと」の演奏ではありません。先生はプロが使うような高価なドラム、マリンバなど「本物の」楽器を使わせてくれました。本物に触れるからこそ、その大切さがわかったし、その音色の美しさもわかりました。皆まだ小学生で、専門の技術はありませんでしたが、私たちはどうすれば美しいハーモニーが作れるかを考えて思考錯誤を繰り返しました。私など毎晩夕食のときにお茶碗をドラムに見たてて練習するほど熱中したものでした。自分たちで考えて作り上げる楽しさがそこにありました。

私のいた小学校では、国語の時間も自主性を尊重し、「考えさせる」ものでした。ある日、先生が『はだしのゲン』という漫画を紹介してくれました。広島原爆をテーマにした漫画ですが、私たちはすぐにそのリアルさにひき込まれ、競い合って本を借りました。そしてこれをきっかけに、戦争関連の本を借りて読むようになり、皆で意見を言い合いました。戦争を体験したお年寄りにインタビューに行き、その発表会をしたりもしました。「戦争はこわい。いやだ」という強い感情をいただき、夢中で調べたのを覚えています。当時は気づきませんでしたが、すばらしい教育でした。実にうまい。クラスの皆を同じ本に熱中させる。そして、もっと読みたいという気持ちにさせる。そうすれば、自然に子ども主導の学びの輪が広がります。当時の先生たちには頭が下がる思いです。

現在『はだしのゲン』は英訳され、外務省の「外交」に利用されていますが、私の夢は『はだしのゲン』を各国語に翻訳して、世界中の子どもたちの手元に届けることです。「言語を通して世界の平和を」です。

なかにし くみこ（教授・日本語教育学・現代日本語学）